The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	どのような対人関係ネットワークが主観的幸福感に寄与するか? : JGSS-2003データに基づく対人関係ネットワーク構造に着目した分析
Author(s)	松本, 直仁; 前野, 隆司
Citation	対人社会心理学研究. 2010, 10, p. 155-161
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11406
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

対人社会心理学研究, 10, 2010

どのような対人関係ネットワークが主観的幸福感に寄与するか?

―JGSS-2003 データに基づく対人関係ネットワーク構造に着目した分析―

松本直仁(慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科)
前野隆司(慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科)

心の豊かさ・幸福感を語る上で欠かせない概念として、人々の社会的・対人的な「つながり」が挙げられる。本稿では対人関係と主観的幸福感との関係について包括的な分析を行うため、人々の対人関係ネットワークに係る構造や属性(ネットワークの規模、関係の強さ、接触頻度、相手の属性)を網羅的に反映した因子分析および共分散構造分析を行った。分析の結果、親密な関係との接触頻度や親しみに強い関係性が示された。一方、多数の対人関係を築くことは、生活満足(主観的幸福感)と直接的な関連はみられなかった。そして、「薄く広い関係」の本質的な効用は、関係の多様性にあることが示された。つまり、数多くの交友をもつことよりも、多様な交友関係をもつことに、生活満足を高める上での本質的な意義があることが明らかとなった。

キーワード: 主観的幸福、生活満足、ソーシャルキャピタル、社会ネットワーク、対人関係

問題

主観的幸福感と対人関係

近年、人々の主観的な生活の充足感・幸福感に着目した科学的研究が盛んに行われている。また、それらを包括化した主観的幸福(Subjective Well-being: SWB)の研究は、その数や分野において広がりを見せ、21 世紀以降急速な発展を遂げている。SWB は一般的に主観的幸福感と訳されるが、Diener(2009)は SWB を「人生についての感情的、または認知的な評価のことを示し、幸福や平和、満足感、そして人生の満足度の意味を含む」としている。主観的幸福感は内生的・外生的要素からなる複雑な組み合わせから成り立つ。社会学、経済学、心理学、神経科学、医学、進化生物学らの研究者は、収入(Diener & Oishi, 2000; Easterlin, 2001; Kahneman, Krueger, Schkade, Schwarz, & Stone, 2006)、雇用(Korpi, 1997)、病気(Larsen, 1992)、遺伝(Lykken & Tellegen, 1996)、性格(Diener, Oishi, & Lucas, 2003)、気質的要因(DeNeve & Cooper, 1998)など、さまざまな観点から主観的幸福感の決定因の特定に取り組んできた。多くの研究では、社会生活における人々の「つながり」、つまり、対人関係の重要性を強調している(大坊, 2006)。また、結婚相手、家族、友人といった間柄に対する認知的評価や、ソーシャルサポートなどの相互作用の有無が主観的幸福感へ及ぼす影響が示されている(e.g. Markus & Kitayama, 1991; Kitayama & Markus, 2000; Uchida, Kitayama, Mesquita, Reyes, & Morling, 2008; Waite, Luo, & Lewin, 2009)。ただし、これらの研究は特に「親密な関係」に着目したものであった。すなわち、身近な間柄に対する個別的・限定的な分析が中心であり、例えば情緒的関係を伴わない知人までをも含めたより広範囲な社会的つながりに関する分析は不十分であった。

社会ネットワーク分析

社会的な人間関係の理解に対する重要性の高まりから、近年、ソーシャルキャピタル(社会関係資本)という新たな概念が提唱されている。Putnam(2000)はソーシャルキャピタルを「互酬関係をともなった社会的ネットワーク」と定義している。社会ネットワークの効用は「社会的効用」、「個人にとっての効用」の 2 つの側面から論じられる。前者では、活発な社会ネットワークを有する地域ほど、低い犯罪率、充実した福祉、公衆衛生の向上、効率的な自治、低い政治汚職率を示すことから、ソーシャルキャピタルの社会厚生面での効用が指摘されている(e.g. Putnam, Leonardi, & Nanetti, 1993; Sampson, Raudenbush, & Earls, 1997; Woolcock, 2001)。一方、後者に関しては、Granovetter(1973)の「弱い絆の強さ(the strength of weak ties)」の理論や、他者が持つ資源へのアクセス可能性に関する Lin(2001)の主張のように、結びつきの弱い異質な他者とのつながりが、当人の社会的生活をより豊かにすることが示唆されている。このように、多様な社会ネットワークを築くことが主観的幸福感に寄与すると考えられる。この点に着目し、主観的幸福感とソーシャルキャピタルの関係を調査した Helliwell & Putnam(2004)の研究では、社会ネットワークの評価、すなわち回答者の「主観評価」による家族、友人、近隣との関係の良好性や、社会的信頼が主観的幸福感と正の相

Table 1 本稿の位置づけと先行研究との対比

研究領域	先行研究における現状と制約		本稿の対象
	現状	制約	
SWB研究	ある程度親密な関係（関係の範囲は本人の捉え方に依存）に対する個別的・限定的な分析が中心	接合的関係（異質な他者との関係）の影響について言及されない	・ネットワーク対象として親密な関係および接合的関係を包含する ・主観評価に基づく指標だけでなく、当人の所有する実体的なネットワーク構造についての指標を包含する
社会ネットワーク分析	個人のSWBへの影響分析においては、ネットワークの指標を主観評価（家庭、友人、地域との関係の良好性など）に依存	ネットワーク範囲・評価が主観的認知に限定される。（必ずしも実態が反映されない）	

関を持つことが示されている。ただし、対人関係ネットワークの実体的な構造の差異と主観的幸福感との関係については、これまで言及されてこなかった。

本稿の目的

Table 1 は前述の議論を整理し、本稿の位置づけを示したものである。対人関係から得られる効用は、必ずしも親しい間柄との情緒的なサポートの授受にとどまらない。社会における異質かつ結びつきの弱い他者との関係(接合型関係)からもたらされる人的資源(スキル・経験の知的資源や協力)は、当人の生活適応能力を高める。またそれは、生活のあらゆる面における満足感、つまり主観的幸福感に影響を及ぼすと考えられる。しかし、先行研究では、概して対象とする対人関係やその評価が個別的・限定的であり、必ずしも対人関係のネットワーク全体を包括的に捉えた一般的な分析が行えていなかった。

現代日本では交通や通信技術が発達し、コミュニケーション手段の多様化、利便性の向上により対人関係構築や維持のコストが低下する一方、社会のつながりの希薄化が問題視されて久しい(e.g., 大坊, 2009; 内閣府, 2007)。これらへの対応を議論する上で、まず「どのような対人関係を構築していくことが人々の主観的幸福感に資するか」を明確化すべきである。つまり、人々の対人関係ネットワーク構成を網羅的かつ構造的に分類すること、その上で分類された各要因が人々の主観的幸福感にどのような影響を及ぼすかにを明らかにすることが、人々の生活に資する対人関係のあり方を理解する上で重要である。

そこで、本稿では第一に、広範囲な対人関係ネットワークにおけるネットワーク構成を網羅的に捉えた指標および概念構造を検討する。具体的には、中尾(2005)のネットワーク構成の分類(Table 2)で示された 4 つの分類を元に、対応する観測変数の同定および妥当性の検証を行う。第二に「主観的幸福感」および「対人関係ネットワーク」双方の構造を包括的に捉えたモデルの分析を行う。そして、最終的に人々の主観的幸福感に影響を及ぼす

概念構造	内容
ノード数	ネットワークの規模：ネットワークが何人から構成されているか
親密性	ネットワークの属性：相手と当人との関係の強さ、親しさ
アクセス頻度	当人との関係：ネットワークの相手とどの程度接触しているか
多様性	ネット他者の属性：当人が持つネットワークに関する属性の多様さ

Table 2 対人関係ネットワークの概念構成(中尾, 2005)

対人関係ネットワークの要因(構成概念)を明らかにすることを本稿の目的とする。

島井(2009)および Sternberg(1986)は、家族・親友など近しい間柄との親密な関係が主観的幸福感へ影響を及ぼすと述べている。そのような間柄との接触頻度は必然的に高いものと推測できる。つまり、ネットワーク構成のうち、近しい間柄との親密性の強さやアクセス頻度は主観的幸福感と正の相関を持つと考えられる。一方、接合型関係で強調される概念は、当人が持つネットワークの多様性であると考えられる。なぜならば、異質かつ多岐にわたる分野との関係を構築していることは、生活のあらゆる問題に適応していくことを容易にするからである。そしてその適応能力の向上は、当人の人生を豊かにするものと考えられる。すなわち、多様な関係を構築しているほど、主観的幸福感にポジティブな影響が及ぶと考えられる。上記の議論より、多くの交友をもつことよりも、親密かつ多様な交友関係をもつことの方が、主観的幸福感を高める効果があると推測される。本稿ではこの考え方の妥当性を検証する。

方法

データと変数

本稿の分析に当たり、「日本版 General Social Survey<JGSS-2003>」[1] (大阪商業大学比較地域研究所・

Table 3 場面ごとの会話相手人数(name generator 記入外の人数も含む)

	N	0人	1人	2人	3人	4人	5人以上	無回答	*M*	*SD*
相談ネット数	997	67	159	241	221	180	129	―	**3.05**	2.50
		(6.72%)	(15.95%)	(24.17%)	(22.17%)	(18.05%)	(12.94%)			
時事会話ネット数	997	223	242	224	152	92	64	―	**2.27**	3.40
		(22.37%)	(24.27%)	(22.47%)	(15.25%)	(9.23%)	(6.42%)			
仕事相談ネット数	997	136	180	221	196	141	121	2	**2.83**	3.04
		(13.64%)	(18.05%)	(22.17%)	(19.66%)	(14.14%)	(12.14%)	(0.20%)		

注) ()内は行%

東京大学社会科学研究所)の個票データの提供を受けた。

JGSS-2003 は、日本の社会と人々の意識や行動の実態把握を目的とし、2003年10月下旬－11月下旬にかけて、2003年9月1日時点で全国に居住する満20－89歳の男女個人を対象に実施された全国調査である。

JGSS-2003のB票では、2つのネットワーク指標が項目に組み込まれている。name generator(Burt, 1984)とposition generator(Lin & Dumin, 1986)である。name generatorとは、回答者がよく話す相手を数人あげ、それらの人の属性を詳しくたずねていく方法である。一方position generator とはさまざまな社会的地位にある個人との面識があるかどうかをたずねるものである。前者は比較的親密なネットワークの検証に向いており、後者は人脈の多様性を調べる場合に向いているとされる(安野, 2005)。

name generatorに関して、JGSS-2003では、「あなたが重要なことを話したり、悩みを相談したりする人たち(問1-1)」、「あなたが日本の政治家や選挙・政治について話をする人たち(問 2-1)」、「仕事について相談したり、仕事のアドバイスをもらう人たち(問 3-1)」、をそれぞれ最大 4人まで挙げてもらい、挙げられた他者に関する詳細質問(性別、年齢、職業、回答者との間柄や接触頻度など)を個別に行っている。また、各項目の話し相手が4人より多い場合は、その人数だけを尋ねている。上記3つの分類ごとの会話相手人数をTable 3に示す。なお、本稿の分析に)では有職者のみを分析対象とした。無職の回答者は問3-1などにおいて対象外となるため本稿の分析からは除外した。最終的に調査実施時点で有職の回答者(N = 997、平均年齢47.30(SD = 13.82)、男501名、女496名)を対象に分析を行った。

Table 4 対人関係ネットワーク指標

構成概念	観測変数	観測変数の説明
(1) ノード数	相談ネット数	name generatorで抽出された他者の数。(問1-1) および (問1-2) の合計値 i)
	時事ネット数	name generatorで抽出された他者の数。(問2-1) および (問2-2) の合計値 i)
	仕事相談ネット数	name generatorで抽出された他者の数。(問3-1) および (問3-2) の合計値 i)
(2) 親密度	共通趣味	(問7-12-1)「共通の趣味や娯楽をもっている (0:非選択, 1:選択)」の選択率
	借金可否	(問7-12-3)「まとまったお金を借りることができる (0:非選択, 1:選択)」の選択率
	親しさ	(問5-9)「あなたは、その人とどのぐらい親しいですか (1:とても親しい、2:親しい、3:それほど親しくない)」の回答を得点化し、name generatorで言及された人数で平均化した値
(3) アクセス頻度	会話頻度	(問6-5)「その人たちとあなたは、通常どのくらいの頻度で話をしますか(電話やメールも含みます)。(1:ほとんど毎日、2:週に数回、3:週一回程度、4:月一回程度、5:年に数回)」の回答を得点化し、name generatorで言及された人数で平均化した値
	会合有無	(問7-12-3)「最近、6ヶ月間に、遊びや食事のために一緒に出かけてことがある (0:非選択、1:選択)」の選択率
(4) 人脈の多様度	人脈多様度	(問27)「あなたには次のようなお知り合いがいますか。あなたが話をすることがあるくらいよく知っている人のことです。それは男性ですか、女性ですか。どちらもいれば両方に○をつけてください。」に対し18項目のうち、男女いずれか、または両方を選択した数の合計値

i)重複を考慮せず、各ネット数毎にそれぞれname generatorで抽出された数を算出している (異なるネットで同じ人が抽出された場合でも個別に計上している)

Table 5 対人関係ネットワーク指標の平均スコアおよび標準偏差

観測変数	有効回答数	平均	標準偏差	無回答数
共通趣味	995	0.45	0.36	2
借金可否	995	0.16	0.27	2
親しみ	995	2.51	0.61	2
会話頻度	995	3.68	1.09	2
会合有無	995	0.65	0.36	2
人脈多様度	923	4.63	3.87	74

Table 6 領域別満足度の度数分布

	不満	どちらかというと不満	どちらともいえない	どちらかというと満足	満足	無回答
(問9-3) 仕事満足	38 (3.81%)	88 (8.83%)	229 (22.97%)	382 (38.31%)	259 (25.98%)	1 (0.10%)
(問12A) 地域満足	32 (3.21%)	93 (9.33%)	298 (29.89%)	282 (28.28%)	283 (28.39%)	9 (0.90%)
(問12B) 余暇満足	38 (3.81%)	132 (13.24%)	329 (33.00%)	299 (29.99%)	188 (18.86%)	11 (1.10%)
(問12C) 家庭満足	19 (1.91%)	86 (8.63%)	342 (34.30%)	290 (29.09%)	252 (25.28%)	8 (0.80%)
(問12D) 家計満足	114 (11.43%)	231 (23.17%)	344 (34.50%)	207 (20.76%)	93 (9.33%)	8 (0.80%)
(問12E) 友人満足	13 (1.30%)	49 (4.91%)	333 (33.40%)	326 (32.70%)	265 (26.58%)	11 (1.10%)
(問12F) 健康満足	24 (2.41%)	101 (10.13%)	288 (28.89%)	301 (30.19%)	275 (27.58%)	8 (0.80%)

注) ( )内は行%

position generatorでは、「行政職員」、「マスコミ」、「医師」、「IT 技術者」など 18 項目の職種について知り合いの有無を尋ねている。なお、調査票では男女それぞれについて知り合いの有無を尋ねているが、本稿では性別にかかわらず男女どちらかに知り合いがいるかを分析対象として扱うこととした。ネットワーク属性の構成概念((1)ノード数、(2)親密性、(3)アクセス頻度、(4)多様性)に対応する観測変数については、JGSS-2003 の調査項目より該当するものを抽出し、適宜指標化している。各観測変数(name generator および position generator 質問項目)の対応を Table 4 に、それらの基礎統計量を Table 5 に示す。主観的幸福感に関する質問については、「家計満足」、「仕事満足」、「友人満足」など 7 領域に対する領域別満足度(5 件法)の回答を用い、生活満足(分析において主観的幸福感と同義とみなす)の観測変数として用いた。Table 6 に各領域別満足度についての回答者分布を示す。

分析と結果

分析 1: 対人関係ネットワークの概念構造

まず、ネットワーク属性の指標(観測変数)と構成概念の関係の妥当性を検証するため、各ネットワーク属性の観測変数について探索的因子分析(主因子分析、プロマックス回転)を行った。なお、観測指標のうち、平均値が標準偏差を下回った「借金可否」は、フロア効果が生じたものと判断し分析から除外した。因子分析の結果、固有値1以上の基準から Table 7 に示す 3 因子(I～III)が抽出された。なお、回転前の 3 因子での累積寄与率は 44.39%であった。

Table 7 対人関係ネットワーク指標の因子分析結果

変数	因子 I	因子 II	因子 III
仕事相談ネット数	**.95**	-.04	-.11
時事会話ネット数	**.59**	.14	-.03
相談ネット数	**.56**	-.02	.26
親しさ	-.03	**.95**	.05
会話頻度	.02	**.59**	-.13
会合有無	.06	**.41**	.01
人脈多様度	-.02	-.03	**.57**
共通趣味	.06	.27	**.36**
因子間相関	I	II	III
I	—	.17	.42
II		—	.12
III			—

注) 太字:因子負荷0.3以上

第 1 因子は、相談ネット数、時事会話ネット数、仕事相談ネット数というネットワークの「ノード数」に関わる因子となっている。また、第 2 因子は会話頻度、親しさ、および外出や食事などの会合有無から構成された。これらはネットワーク内の他者との「親密度」を示す因子といえよう。第 3 因子には人脈多様度の因子負荷が高く、共通趣味など社会的関係を示す指標を含む。つまり、この因子は社会的関係における「社会的な多様性」を示す概念と考えられる。

当初想定した 4 つの構成概念(ノード数、親密性、アクセス頻度、多様性)に対し、因子分析の結果はノード数、親密度、社会的多様性の 3 因子からなる構造となった。

分析 2: 主観的幸福感(生活満足)の規定因

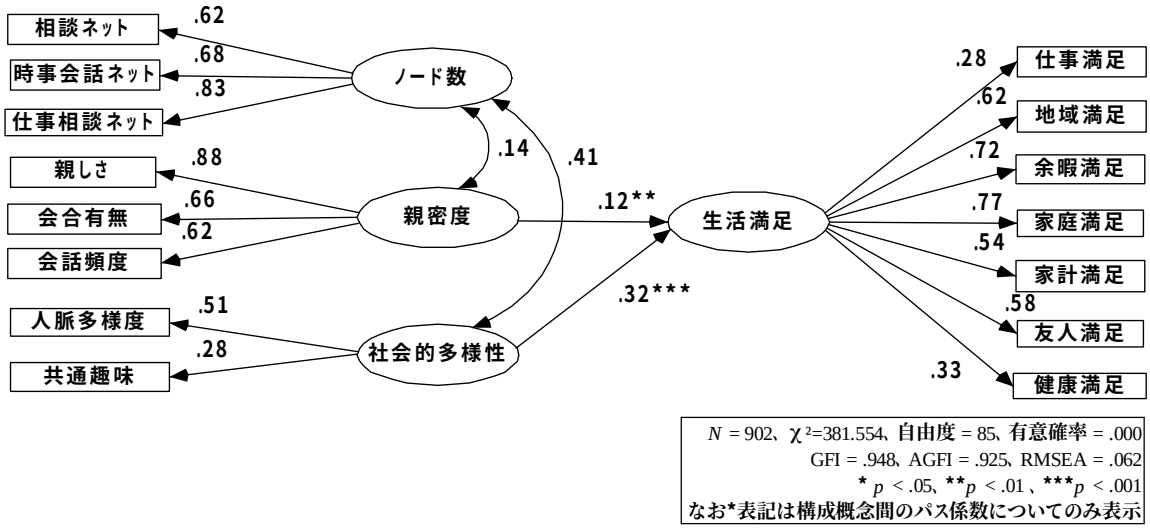

Figure 1　共分散構造モデリングによる分析結果(図中数値は標準化係数)

次に、対人関係ネットワークの構成概念(ノード数、親密度、多様度)が主観的幸福感(生活満足)に及ぼす影響を検証するため、共分散構造分析を行った。主観的幸福感(生活満足)に係る観測変数として、Table 6 で示した各領域別満足度の指標を用いた。また、前述の探索的因子分析にて同定した対人関係ネットワークの構成概念が生活満足に影響を及ぼす、というモデルで分析を行った。なお、対人関係ネットワークの構成概念間の共分散については、探索的因子分析の因子間相関の値を考慮しモデルに反映させた。具体的には「親密度」、「社会的多様性」間の因子間相関は 0.03 と低い値を示していたため、「親密度」、「社会的多様性」間の共分散パスを設定しないモデルを構築した。

まず、対人関係ネットワークの構成概念となる 3 つの因子がすべて生活満足に影響を及ぼすことを仮定して分析を行った。その結果、「ノード数」から「生活満足」へのパス係数が 5%水準で有意ではなかった。そこで有意ではなかったパスを削除し、再度分析を行った。Figure 1 に最終的なモデルを示す。GFI = 0.948、AGFI = 0.925、RMSEA = 0.062 であり、当該モデルは十分な適合性をもつものと判断できる。また、構成概念間のパス係数に着目すると、社会的多様性が生活満足に対して中程度の正の有意なパスを示しており、親密度は生活満足に対して低い値ではあるが有意な正のパスを示していた。

考察

分析結果の解釈

本稿では人々の対人的な関係と主観的幸福感に着目し、まず対人関係ネットワークにおける構成概念の同定を行った。また、抽出された対人関係ネットワークの各構成概念に対する「領域包括的な生活満足」との関係について分析を行った。

第一に、対人関係ネットワークにおける構成概念の同定において、中尾(2005)の 4 つのネットワーク構造の分類(ノード数、親密性、アクセス頻度、多様性)に対し、因子分析を行った結果、3 因子構造(ノード数、親密度、社会的多様性)となった。なお、親密性とアクセス頻度は「親密度」という単一の因子となった。お互いの会話や会合などの頻度が、当人とネットワークの相手との関係の親しさを反映することが示された。また、社会的多様性は、人脈の広さと趣味に関する指標を含む因子であることから、趣味などの余暇活動が多様な人脈形成に寄与していることが示唆される。

第二に、対人関係ネットワークの生活満足への影響モデルを共分散構造モデリングにより分析した結果、ノード数、親密度、社会的多様性の 3 つの構成概念のうち、「社会的多様度」と「親密度(親密性およびアクセス頻度)」が生活満足に対して有意な正の相関を示す一方、「ノード数」は関連が示されなかった。この結果は本稿の仮説を支持する結果である。さらに対人関係ネットワークで構成される生活満足から領域別満足へのパスでは、すべての領域の満足度に対して有意な正の相関が示された。つまり、親密度および当人がもつネットワークの多様性の双方が、主観的な満足感の向上に資することに加え、それらが生活のあらゆる側面においてポジティブな効果をもたらすことを示す結果となった。

結論および今後の展望

本稿では、対人関係が主観的幸福感に及ぼす影響について、関係包括的かつ多面的な分析を行うため、社会ネットワーク分析のモジュールを組み込んだモデルにて分析を行った。既存研究では、対人関係が比較的親密な関係に対する限定的・個別的な分析であった。それに対

し、本稿では、以下の 2 点を考慮することによって、対人関係の生活満足度への影響について、網羅的な検証を試みた。第一に、異質かつ結びつきの弱い関係をも包含した一般性のある分析を行った。また、第二に、対人関係に対する当人の主観的な評価(関係の良好性や関係満足度)だけでなく、当人が持つ対人関係ネットワークに係る構造や属性(ネットワークの規模、関係の強さ、接触頻度、相手の属性)を反映した。

分析の結果、親しい他者との接触や親近感が重要であった。一方、多数の対人関係を築くことは、生活満足(主観的幸福感)に直接的な影響を及ぼさなかった。また、接合的関係の本質的な効用は、関係の多様性にあることを明らかにした。つまり、「数多くの交友をもつことよりも、多様な交友関係をもつことの方が、生活満足を高める上で本質的な意義をもつ」ということが示唆されたといえる。

これまでの主観的幸福感に関する研究では、現代社会の重要な価値観である「多様性」への言及が必ずしも十分ではなかった。これに対し、交友関係の「多様性」という新たな視点での価値について、主観的幸福感との関連から実証的に示した。本稿で多様性と主観的幸福感の関係性を示せたことは、主観的幸福感の研究に新たな視点を提示したといえる。本稿で注目した対人関係の多様性を拡張し、生活におけるさまざまな多様性(例えば、言語能力や社交能力など社会的スキルに関する多様性や、職業経験や居住経験など人生経験に関する多様性など)が、生活の充足感・満足感に及ぼす影響の検証は主観的幸福感の理解を深める上で重要な課題となろう。

引用文献

Burt, R. S. (1984). Network items and the general social survey. *Social Networks,* **6**, 293-339.

大坊郁夫 (2006). 幸福感および生きがいと人間関係 島井哲志(編) ポジティブ心理学―21 世紀の心理学の可能性― ナカニシヤ出版 pp. 193-208.

大坊郁夫 (2009). Well-being の心理学を目指す―社会的スキルの向上と幸福の追求― 対人社会心理学研究, **9**, 25-31.

DeNeve, K. M., & Cooper, H. (1998). The happy personality: A meta-analysis of 137 personality traits and subjective well-being. *Psychological Bulletin,* **124**, 197-229.

Diener, E., & Oishi, S. (2000). Money and happiness: Income and subjective well-being across nations. In E. Diener & E. Suh (Eds.), *Culture and Subjective Well-being.* Cambridge: MIT Press. pp. 185-218.

Diener, E. (2009). Contributions of the ed diener laboratory to the scientific understanding of well-being. Ed Diener Positive Psychology <http://www.psych.uiuc.edu/~ediener/contributions_of_lab.htm> (October 20, 2009).

Diener, E., Oishi, S., & Lucas, R. E. (2003). Personality, culture, and subjective well-being: Emotional and cognitive evaluations of life. *Annual Review of Psychology,* **54**, 403-425.

Easterlin, R. A. (2001). Income and happiness: Towards a unified theory. *Economic Journal,* **111**, 465-484.

Frey, B. S., & Stutzer, A. (2002). *Happiness and economics: How the economy and institutions affect well-being.* Princeton, N.J.: Princeton University Press.

Granovetter, M. S. (1973). The strength of weak ties. *American Journal of Sociology,* **78**, 1360.

Helliwell, J. F., & Putnam, R. D. (2004). The social context of well-being. *Philosophical Transactions of the Royal Society of London.Series B, Biological Sciences,* **359**, 1435-1446.

Kahneman, D., Krueger, A. B., Schkade, D., Schwarz, N., & Stone, A. A. (2006). Would you be happier if you were richer? A focusing illusion. *Science,* **312**, 1908.

Kitayama, S., & Markus, H. R. (2000). The pursuit of happiness and the realization of sympathy: Cultural patterns of self, social relations, and well-being. In E. Diener & E. Suh (Eds.), *Subjective well-being across cultures.* Cambridge: MIT Press. pp. 113-161.

Kitayama, S., & Uchida, Y. (2003). Explicit self-criticism and implicit self-regard: Evaluating self and friend in two cultures. *Journal of Experimental Social Psychology,* **39**, 476-482.

Korpi, T. (1997). Is well-being related to employment status? unemployment, labor market policies and subjective well-being among swedish youth. *Labour Economics,* **4**, 125-147.

Larsen, R. J. (1992). Neuroticism and selective encoding and recall of symptoms: Evidence from a combined concurrent-retrospective study. *Journal of Personality and Social Psychology,* **62**, 480-488.

Lin, N. (2001). *Social capital: A theory of social structure and action.* Cambridge: Cambridge university press.

Lin, N., & Dumin, M. (1986). Access to occupations through social ties. *Social Networks,* **8**, 365-385.

Lykken, D., & Tellegen, A. (1996). Happiness is a stochastic phenomenon. *Psychological Science,* **7**, 186-189.

Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review,* **98**, 224-253.

内閣府 (2007). 平成 19 年版 国民生活白書―つながりが築く豊かな国民生活―

中尾啓子 (2005). 複合ネットワークの概要―3種類の社会ネットワークの複合と重複― 日本版 General Social Surveys 研究論文集, 4, 131-152.

Putnam, R. D. (2000). *Bowling alone: The collapse and revival of American community.* New York: Simon & Schuster.

Putnam, R. D., Leonardi, R., & Nanetti, R. Y. (1993). *Making democracy work: Civic traditions in modern Italy.* Princeton, NJ: Princeton university press.

Sampson, R. J., Raudenbush, S. W., & Earls, F. (1997). Neighborhoods and violent crime: A multilevel study of collective efficacy. *Science,* **277**, 918-924.
島井哲志 (2009). ポジティブ心理学入門―幸せを呼ぶ生き方― 星和書店
Sternberg, R. J. (1986). A triangular theory of love. *Psychological Review,* **93**, 119-135.
Uchida, Y., Kitayama, S., Mesquita, B., Reyes, J. A., & Morling, B. (2008). Is perceived emotional support beneficial? Well-being and health in independent and interdependent cultures. *Personality and Social Psychology Bulletin,* **34**, 741-754.
Waite, L. J., Luo, Y., & Lewin, A. C. (2009). Marital happiness and marital stability: Consequences for psychological well-being. *Social Science Research,* **38**, 201-212.
Woolcock, M. (2001). The place of social capital in understanding social and economic outcomes. *Canadian Journal of Policy Research,* **2**, 11-17.
安野智子 (2005). JGSS-2003 にみるパーソナル･ネットワークと政治意識 日本版 General Social Surveys 研究論文集, **4**, 153-167.

註

1)日本版 General Social Surveys(JGSS)は、大阪商業大学比較地域研究所が、文部科学省から学術フロンティア推進拠点としての指定を受けて(1999-2003 年度)、東京大学社会科学研究所と共同で実施している研究プロジェクトである(研究代表: 谷岡一郎・仁田道夫、代表幹事：佐藤博樹・岩井紀子、事務局長：大澤美苗)。東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センター SSJ データアーカイブがデータの作成と配布を行っている。

What affect subjective well-being in interpersonal relation network? :
Social network structure analysis of Japanese General Social Survey Data (JGSS-2003)

Naohito MATSUMOTO (*Graduate School of System Design and Management, Keio University*)
Takashi MAENO (*Graduate School of System Design and Management, Keio University*)

Interpersonal relationships are one of the most important determinants for subjective fulfillment, satisfaction and well-being. The purpose of this paper is to explore the influence of interpersonal relationships and subjective well-being comprehensively. Thus, a model including entire structure and attributions of social networks was examined by exploratory factor analysis and structural equation modeling. The result indicates significant correlation between closeness, contact frequency and life satisfaction, while the number of relations does not show direct influence. In addition, the result also suggests that diverseness of interpersonal relationships has intrinsic value of broad-ranging relationship. This paper concludes that, as well as relationship closeness, diverseness of interpersonal relationships is more important than the number of personal ties for life satisfaction.

Keywords: subjective well-being, life satisfaction, social capital, social network analysis, interpersonal relationship.